

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

砂漠とサバンナの国～ナミビア

私は2011年3月から10月まで、南部アフリカのナミビアという国で仕事をする機会がありました。ナミビアは日本人にはあまり馴染みがなく、また他にはちょっと見当たらないような、とてもユニークな国です。ナミビアとはどのような国なのかを紹介したいと思います。

ナミビアは1990年に南アフリカから独立した若い国です。アフリカ大陸の大西洋岸、南緯18～28度に位置しています。北はアンゴラ、東北はザンビア、東はボツワナ、南は南アフリカに接しています。国土は80万平方キロと日本の2.2倍もあるのに、人口は200万人しかいません。

自然条件からみた一番の特徴は、ナミビアは乾燥地であるということです。降雨量は年間400ミリぐらいしかなく、国土の大半は砂漠と高原です。河に水が流れるのは雨期の間だけです。大西洋岸の海沿いは年間雨量100ミリ程度の砂漠（ナミブ砂漠）か土漠です。南極海からの寒流が流れているため、水温は15度ぐらいと冷たく、海からの風は涼しくてさわやかですが、砂漠側からの陸風が吹く早朝から午前中は、ちょっとした砂嵐になります。海岸線のほぼ真ん中の南緯23度付近に、港湾都市ウォルビスベイ、その北30kmにウラン鉱山開発の町スワコップムンドの2つの都市があります。両都市とも洒落た町並みですが、すぐ近くに大きな砂丘が迫り、砂漠の中にポツンと孤立しています。

国の東半分の内陸部は基本的に高原の台地です。首都ウイントフックはウォルビスベイから350kmほど東にはいった標高1,500メートルぐらいの高原にあります。町中は街路樹と植栽があって緑が豊かですが、町の外縁部は灌木のみのサバンナです。真夏（11～1月）外はあまり気温が上がることもなく最高気温が27～28度ぐらい、朝晩は10度前後まで冷えます。冬（6～8月）はかなり寒くて最低気温は氷点下になりますが、日中は25度ぐらいまで上がります。高原部も全体的に降雨量400ミリ程度と少なく、基本的に耕作には向いていないところが大部分で、農産物の8割は南アフリカからの輸入品です。その中で大規模牧場の放牧による肉牛畜産だけは競争力があります。

人口の9割以上は黒人で、その半数が同国北部出身のオバンボ族です。北部がもともと彼らの住んでいたところでもあり、また南アフリカが人種隔離のために黒人居住地域として指定した場所でもあります。このオバンボ族が対南ア独立闘争の中心勢力となり、現在の政府与党SWAPOの最大支持基盤です。

他方、黒人政権が樹立したからといって、ジンバブエのように白人から土地を取りあげたり追い出したりした訳ではなく、穏健



ナミビアの大西洋岸の町スワコップムンド近郊の砂漠にて

で融和的な政権運営が続いています。他のサブサハラ・アフリカ諸国と際立って違うナミビアの特長のひとつは、この穏健な政治と治安の良さです。

経済はというと、ダイヤモンド、ウランという地下資源に恵まれ、輸出用の牛肉（白人の大規模牧場）と水産物（南アとナミビアの合弁）などが底堅く外貨を稼いでいることから、国民一人当たり所得は4,200ドル（2008年）と立派な中進国レベルです。しかし、実は経済は二重構造で、経済を引っ張る資源輸出部門や都市経済部門に従事する豊かな層と、そうでない貧しい層（北部に暮らす人口の4割）とが存在しています。これは、南アフリカ時代のアパルトヘイト政策の置き土産です。

ナミビア政府にとって最大の政治課題は、雇用創出と経済格差の縮小です。独立後は、「人種隔離」はすでに存在しません。しかし、経済格差は小さくなるどころか悪化の一途をたどり、失業率は38%ともいわれています。これまでの政治的安定は、資源輸出で稼いだお金を黒人低所得層に年金や恩給などで手厚く再分配したり、公務員雇用での黒人優遇政策を進めることで保たれてきましたが、若年層の失業が深刻化するにつれて再分配政策の効き目も限界に近づいています。

今、ナミビアが探し求めているのは、資源の切り売りだけに依存するのではなく、若い人たちの活躍する場を広げる新しい産業を見出すことです。私はその最も有力な候補が国際物流だと考えています。世界屈指の海運各社は、ナミビアを内陸国へのゲートウェイ候補として注目しています。広大な乾燥地が広がる国内だけを見ていると八方ふさがりに見えても、大きな世界地図を眺めてみると意外な突破口が見えて来るように思います。

（文責：IDCJ主任研究員 川原恵樹）